

「国立公園への誘客」議事録

(開催要領)

1. 開催日時：令和2年12月22日(火曜日)13:00～15:00
2. 場所：十和田湖ビジターセンター
3. 登壇者：
十和田八幡平国立公園管理事務所 所長 森川久
一般社団法人十和田奥入瀬観光機構理事長 小野田金司
青森大学総合経営学部教授・観光文化研究センター長/NPO 法人みちのくトレイルクラブ
代表理事 佐々木豊志
風景屋 小林徹平
星野リゾート 奥入瀬溪流ホテル アクティビティユニットディレクター・NPO 法人奥入瀬自然観光資源研究会 副理事長 丹羽裕之

(プログラム)

1. 開会挨拶及び施策説明 森川久
2. 講演①「観光から見た国立公園の自然」 小野田金司
3. 講演②「自然から見た国立公園の観光」 佐々木豊志
4. パネルディスカッション 「これからの国立公園における誘客のあり方とは？」
ファシリテーター 小林徹平
パネリスト 小野田金司／佐々木豊志／丹羽裕之
5. 閉会挨拶 森川久

* 敬称略・順不同

司会：

皆さん、こんにちは。真っ白な雪におおわれた十和田湖からお届けします。十和田湖は青森県の内陸に位置しています。春夏秋冬、四季折々に様々な表情を見せてくれる大変自然豊かな場所です。そして私の後ろには青森県の様々な場所が映されています。三方を海に囲まれていますので、魚も豊富に採れる場所です。魅力ある青森からこの時間は皆さんどうぞお付き合いください。

本日は「未来に向けて 知る・変わる・守る チームNEXT ステップ」シンポジウムをご視聴いただき、ありがとうございます。この時間は「国立公園への誘客」と題して、ここ青森県十和田ビジターセンターからインターネット配信による国立公園に関するオンラインシンポジウムをライブでお送りしていきます。本日私、菓子英里が進行を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

さて本日は、国立公園への誘客が減少している今、コロナ禍での誘客プロモーションの強化、地域活性化、ワーケーションの環境整備など、新しい利用方法の提案をしていきます。青森県内の国立公園の利用について、観光と自然の両面から語っていただき、利用者も楽しみ、地域活性化にもなりながら、自然も保たれる国立公園の魅力について、お話ししていただきます。どうぞ最後までご視聴ください。

そして本日ライブでお送りしておりますここ青森県の十和田ビジターセンターですが、雪が降って真っ白におおわれております。こちらの施設では十和田湖周辺の観光スポットのご紹介や、カルデラ湖である十和田湖の成り立ち、そして取り巻く樹木の標本や生息している野鳥の模型などが展示されています。視聴されている皆様も、今後足をお運びいただければと思います。

それでは本日のプログラムをご紹介します。まずは開会のご挨拶並びに施策説明を、十和田八幡平国立公園管理事務所所長、森川久よりご説明いたします。その後、一般社団法人十和田奥入瀬観光機構理事長、小野田金司様より、「観光から見た国立公園の自然」について、ご講演いただきます。その後、青森大学総合経営学部教授・観光文化研究センター長、NPO 法人みちのくトレイルクラブ代表理事、佐々木豊志様より、「自然から見た国立公園の観光」について、ご講演いただきます。その後、各有識者の皆様による「これからの国立公園における誘客のあり方とは？」のパネルディスカッションを行います。それぞれの立場からの視点でお話ししていただきます。ぜひ最後までご視聴ください。

それでは初めに、今回のオンラインシンポジウムのテーマでもある「国立公園への誘客」について、映像にてご紹介したいと思います。こちらをご覧ください。

司会：

それでは、開会挨拶並びに施策説明を、十和田八幡平国立公園管理事務所所長、森川久よりご説明いたします。森川所長、よろしく願いいたします。

1. 開会挨拶及び施策説明

森川：

皆様、こんにちは。環境省の十和田八幡平国立公園管理事務所の所長をしております森川でございます。本日はオンラインで「国立公園への誘客」シンポジウムをご視聴いただきまして、ありがとうございます。

日本政府全体として、今から4年前、平成28年3月に「明日の日本を支える観光ビジョン、世界が訪れたい日本へ」ということで、観光先進国を目指していこうということで、国として10の改革を進めてきております。10の改革の中で国立公園については、世界水準のナショナルパークへのブランド化を図るということで、より多くの訪日外国人の方々に、日本の国立公園を知っていただく取り組みということで、国立公園満喫プロジェクトを平

成 28 年 12 月から実施しております。

国立公園は日本全国に 34 カ所ありますが、まず先行的に集中的に取り組む場所として 8 カ所が選定され、そのうちの一つに十和田八幡平国立公園も選定されました。その選定を受け、今後どのように国立公園の価値を高めていくかということで、関係者が集まり、国立公園満喫プロジェクトのステップアッププログラム 2020 を、平成 28 年 12 月に策定し、国立公園の価値の高め方、誘客などを、この 4 年間進めてきました。十和田八幡平国立公園では、冬季利用の促進を図ったり、古くから温泉、湯治文化がありますので、そのような文化に触れる機会を多く創出したり、情報発信やプロモーションの強化という 10 ほどのステップアッププログラム 2020 の方針を定め、順次進めてきました。

十和田八幡平国立公園を訪れる利用者の方々は年々増えてきています。ただし今年に入ってから新型コロナウイルスの感染拡大等もあり、十和田八幡平国立公園においても、海外問わず国内の利用者も減少しており、今後どのようにコロナと付き合いながら、より多くの方に国立公園の価値を知ってもらうにはどうしていけばいいかというのが、環境省としての課題でもあります。その中で国立公園、ワーケーション事業というもので、国立公園の雄大な景観の中でくつろぎながら仕事をするワーケーションを推進していくことも考えなければいけない状況です。

本日のテーマは「国立公園への誘客」ということで、国立公園は日本を代表する素晴らしい景観がある自然の風景地ですが、自然だけではなく、自然の中で人々が暮らしている、それぞれの地域ならではの暮らし方、昔から人と自然が共生してきた場所でもあるということ、そういった部分が世界に誇れる日本の国立公園の状況です。

優れた自然の中で、皆様のご印象としても、国立公園というのは何も手をつけずに保護するようなイメージがあるかと思いますが、国立公園を管理する自然公園法第一条に、自然を保護し、もって国民の保健と休養に資するとともに、生物多様性にも寄与するという一方で、保護することによって、多くの国民が休養・休息のために活用するという、保護と利用をうまく循環させながら、車の両輪的な形で国立公園を知ってもらったり、利用してもらったり、保護していくという取組を進めていくことになっています。国立公園の雄大な自然の中で、時間を忘れて旅をするということで、私と自然の関係性を心と体で理解できる場所というのも、国立公園の特徴ではなかろうかと思います。現在コロナ禍において、国立公園はワーケーションの場所として非常に注目が集まっており、これまでの観光の捉え方にとらわれない新しい国立公園への誘客を考えていく機会が、今回のシンポジウムの中で打ち出せるのではないかと期待しております。

この後基調講演として、「観光から見た国立公園の自然」ということで、十和田奥入瀬観光機構の小野田理事長から、地域にお金が落ちていくためにはどうしていったらいいか、また利用だけにかぎらず、自然の価値を損なわずに持続して観光を進めていけばいいかというお話をさせていただく予定です。また青森大学の佐々木センター長からは、「自然から見た国立公園の観光」ということで、自然の保護と利用だけではなく、国立公園との古くて新し

い付き合い方、接し方の提案もお話しいただく予定です。その後に、十和田八幡平国立公園でガイドをされている丹羽様、十和田湖畔において地域のまちづくりにたずさわっている小林さんにファシリテーターをしていただきながら、4人の中で「これからの国立公園の誘客のあり方」について意見交換をしていただき、受け入れる国立公園側でどのような体制で臨めばいいか、プロモーションをどのように進めていけばいいか、それによって持続可能な国立公園観光地としての位置付けにつなげていきたいと思っていますので、限られた時間ではありますが、いろいろとご指導いただきながら進めていければと思います。

簡単ではありますが、開会の挨拶と施策の説明に代えさせていただきます。よろしくお願いいたします。

司会：

森川所長、ありがとうございます。休暇を取りながら仕事をするワーケーション、個人的に大変魅力的だと感じております。今、コロナ禍で閉塞感を感じている方は多くいらっしゃると思いますので、新たな仕事スタイルの一つとして、皆さんも考えてみてはいかがでしょうか。

続きまして、「観光から見た国立公園の自然」について、一般社団法人十和田奥入瀬観光機構理事長、小野田金司様よりご講演いただきます。小野田様、よろしくお願いいたします。

2. 講演①

小野田：

皆さん、こんにちは。一般社団法人十和田奥入瀬観光機構理事長の小野田金司です。よろしくお願いいたします。今日は「観光から見た国立公園の自然」というテーマで、30分程度お話しさせていただきます。

最初に自己紹介ですが、私は実は和歌山市在住で、非常勤でここの理事長をしており、月に1度やってきますが、今日も素晴らしいお天気で、すぐ隣に十和田湖の雪景色が本当に美しく見えます。青森や東北に全く縁がなかったのですが、逆に観光というのはよそ者が見るとよく見える部分もあるので、昨年从这个職を引き受けさせていただいております。本来は大阪観光大学で観光を教えており、その他、いろいろな仕事をしてはいますが、現場が好きなので、地域の観光振興をいろいろしております。

十和田奥入瀬観光機構について説明します。日本版地域DMOということで、観光庁が地域の観光戦略をつくる組織としてDMOをつくっています。十和田市のDMOとして昨年認可され、十和田湖畔の「ぷらっと」という観光交流センターと、十和田市の街中の観光物産センターの2カ所を拠点にして、12名の職員が年間の観光客数を増やしていこうとか、消費額を上げていこうという戦略を立てて、実際に動いています。

ここ最近のいいニュースとしては、行ってみたい温泉地ランキングで、奥入瀬温泉、十和田湖畔温泉が21位になったというニュースが入ってきました。昨年DMOが立ち上がった

て、いろいろなことをしてきました。

まず十和田湖温泉郷を名称変更して奥入瀬溪流温泉、ここには星野リゾートの奥入瀬溪流ホテルを中心として、いろいろな多様なホテルが集まっていますが、ここをアピールしたり、あるいは、今まさに、つい2日ほど前からスタートした「冬の奥入瀬氷瀑ナイトツアー」、こちらもツーリズムアワードで今年入賞したツアー商品になっていますが、冬の十和田の奥入瀬の魅力満喫するツアーを運営しています。あと、先ほどの星野リゾートの奥入瀬溪流ホテルさんが、春夏、コロナ禍に3密対策のオープントップバスツアーを走らせるなど、いろいろな施策を地域一体となって行っております。

冒頭お話にあったワーケーションにつきましては、この後パネルディスカッションのコーディネーターをしていただく小林さんご夫妻が、2年前からすでにワーケーションを実際に始められていました。こういういろいろな素材が全国的に先駆けてできている地域があります。あとは食サービスがちょっと心もとなかったのが、今は奥入瀬を歩く人のお弁当づくりなど、食関係の整備なども現在進めています。

そして、11月までは結構紅葉のシーズンでにぎやかなのですが、その後パタッとお客様が来なくなるので、11月18日から、「カミのすむ山 十和田湖 光の冬物語」というイルミネーションイベントを、十和田湖畔の十和田神社を中心に今展開中です。十和田神社の中にこのような形でたくさんのLEDで幻想的な雰囲気をつくって、冬の閑散期にお客様に来ていただくということを現在実施中です。12月の後半からは「冬花火 in 十和田湖」、これもコロナ対策の観光庁の誘客多角化滞在促進事業ということで、冬花火のイベントを開催します。いろいろなイベントなどを使いながら、コロナ禍の時代をなんとか切り抜けていきたいと考えています。

ではここで、ニュー・ノーマルと言っていますが、コロナが終わった後の観光立国、地方はどのような方向性で行けばいいのかということをご説明したいと思います。まず日本政府の観光目標数値は、これはアベノミクスで目標がつけられましたが、今回コロナがありました。政権が変わってもこのまま進めますということで、先日菅総理から発表されました。2030年、消費額で言うとインバウンド15兆円と国内旅行消費22兆円で、合計37兆円。よくインバウンドの6,000万人といわれますが、消費額の37兆円がすごく大きいところです。37兆円というと、自動車産業を抜いて日本の観光産業がトップクラスの産業になるということです。2030年、あと10年すると観光を中心にした産業構造に変換しようというのが、日本政府の目標です。現在どれぐらい消費額があるかと言うと、約28兆円です。うち外国人、インバウンドが4.8兆円、まだまだ17.2%と少ないですが、消費額では結構あります。

あと、コロナ禍のときに各国経済復興楽観度調査というデータがありまして、圧倒的に日本は経済の復興が楽観的ではない、悲観的であるということです。他の国は結構高い位置にあります。日本は案外コロナを防いでいる割には非常に悲観度が高い。逆に言うと、日本人の方はなかなか慎重になって、今、旅行する意欲を持っていないということがあります。

そのため日本政府では今 Go To キャンペーンを行い、悲観度が高い国民の中でもっと動いてもらおうと思って、この Go To Travel キャンペーンを行っているということです。これも年末年始ストップしましたが、キャンペーンのアクセルを踏むところとブレーキを踏むところもウオッチしながら、地方の観光はいろいろ考えて進んでいく必要があるかなと思っています。

なぜインバウンド、インバウンドと国は言うのか。実は消費額を見てみますと、4.2 倍の消費額があるということです。外国人が1人来てもらうと日本人が 4.2 人来ると同じぐらいあるということです。1人当たり 15 万円の消費額がある。この経済効果は域外、国外から入ってくるということで、そのまま国の利益となるということで、日本政府はここを応援しているのです。特に日本はこれからどんどん人口が減っていきませんが、世界の人口は 2050 年度をピークにして、特にアジアは成長していきます。アジア以外も日本以外は全部人口が増えていくという中で、世界の旅行人口も増えていきますので、ここは日本としてはぜひゲットしていきたいところです。

特にこのインバウンド市場においては、一番お金を使うとなると中国が一番大きいですが、オレンジ色のフランス、オーストラリア、アメリカ、イギリス、右が平均泊数で縦が旅行支出ですが、長く泊まってくれるしお金も使ってくれるというので、やはり欧米豪は、インバウンド市場にしては非常に効率がいい、ここを狙いましょうというのがターゲットとして考えられます。

そのターゲットに対し、十和田辺りはどう考えればいいのかというのを、事例をご紹介しながらご説明します。これは 2019 年、ちょうど 1 年前、コロナが出てくる前のランキング資料ですが、欧米豪を中心としたガイジンポットというサイトで、2020 年外国人が訪れるべき日本の観光地ランキングが発表されました。東京オリンピックがあるので下馬評では東京都が圧倒的 1 位だと思われましたが、実は和歌山県の熊野が 1 位になりました。私も和歌山県民ですが、和歌山県民でも「え？どうして熊野？」と驚いています。でもこのベスト 10 を見ると、青字は国立公園あるいは国定公園で、東京、札幌、横浜などの都市圏もありますが、ここにはいわゆる京都や大阪は出てこない感じです。これが欧米豪からすると、2020 年、次に訪れたい場所であるわけです。残念ながら十和田はありませんが。欧米豪の人たちは、国立公園など、自然に期待しているところが見えます。

私も和歌山県なので、熊野は 1998 年からいろいろな形で関わっていますが、ここを訪れる多くの欧米人がなぜ来たのかというと、この二つの文字、「PEACEFUL」と「SPIRITUAL」です。ほとんどの人がこの言葉でやって来ます。ここは世界遺産、「紀伊山地の霊場と参詣道」ですが、ここの評価としては、異なる宗教、神道、熊野三山、それから仏教は青岸渡寺、真言宗の高野山、山岳宗教の大峰山と、異なる宗教が 1000 年以上も争いもなく平和に共存してきたというのが、実は世界遺産に選ばれるとき大きな評価になったと聞いています。

ちょうど 9.11 のテロがあった年だったので、世界の人には「宗教戦争というのは当たり前のように思っていたが、日本のこの小さなところにたくさんの宗教が 1000 年以上も平和に

共存していたというのは素晴らしい」という評価をしているわけです。ですので、彼らは非常に PEACEFUL で SPIRITUAL という評価をして、それを求めて熊野にやってくるということです。熊野自体がすでに世界ではブランド化されて、持続可能にずっと続いている、極論を言えばもうマーケティングもセールスもしなくていい、そういう状態になっている、これは非常に大きなことです。

PEACEFUL JAPAN、実は外国人はいろいろ研究をされます。特に新海誠や宮崎駿の作品は、神道のことをいろいろ書いていることが多いので、その辺も興味をそそられるところのようです。ちょうど中国が春秋戦国時代で非常に戦争があった時代に、平和を求めて中国から日本に渡ってきたということが古事記に書かれています。大国主命の国譲り、縄文人の大国主命から天照大神の時代になったという背景も結構外国人は調べており、伊勢神宮に参拝するなどということもあります。こういうストーリーが非常に大事だと思っています。

観光地づくり3層モデル、コトラーみたいに3層になっていると思います。まずテーマです。熊野のように PEACEFUL、SPIRITUAL というテーマがあり、そこに必須条件として、インフラ、食事、宿泊、交通、ガイド、文化財、交流、産業、ボランティアなどという条件も取り揃えて、外側に体験コンテンツがいろいろあるというスタイルで、これからの観光地はつくっていく必要があります。

国立公園では自然がテーマで、ご神体ですから、ここにやはりストーリーも欲しい、そして必須条件としてインフラ。テーマは自然、そして必須条件を揃えていく、そして体験コンテンツ、いろいろなガイドツアーやカヌー体験などを揃えていく、これが3層になっていくことが今後の誘客につながると思っています。

私はラグビーが大好きなのですが、昨年ワールドカップラグビーで日本中が湧き上がって、間もなくトップリグも始まりますが、これもほとんどヨーロッパの人が多かったです。イングランドやオーストラリア、ニュージーランドから来て、過去最大の経済波及効果。「ラグビーなんて日本でやって誰が来るんだろう」と言われましたが、なんと6,464億円もありました。ラグビーが強いところでずっとやっていたワールドカップを、そう強くない日本でやってこれだけのすごい効果がありました。

そのときのインバウンド、訪日客1人の消費額が68万円です。平均宿泊が16泊、通常の消費額の4.6倍です。いかに欧米豪の方々は、日本に来ると長く滞在して消費するかということです。ラグビーを見ているだけではないんですね。やはりその合間に自然を満喫し、おいしいものを食べて、そういうことでお金を使ってくれるということです。このときの欧米豪の人たちは83%いて、うち60%が初来日、そして必ずまた来たいという人が75%いました。今コロナでみんな自粛していますが、ちょっと1年前を振り返ると、欧米豪のたくさんお金を持っている人たちが、必ずまた来たいという人が75%もいたということを思い出してほしいと思います。

実は熊野の地方では、もうすでにヨーロッパのツアー会社から予約がたくさん入ってまして、熊野はほぼいっぱいになっています。4月の桜のシーズンから夏のシーズンにかけ

て、欧米豪のツアー会社でいっぱいになっています。まだ飛行機が飛ぶかどうかはこれからの問題ですが、ツアー会社としては、「早く飛んでくれよ、そうしたらすぐに熊野に行きたい」みたいになっています。残念ながら十和田ではまだ来年の予約がヨーロッパからは入っていませんが、1年先、2年先の予約が入るようなブランディングができた地域にしていくというのが、我々の目標でもあります。

もう一つ、観光甲子園、これは高校生の観光選手権ですが、私はここの代表をしていますので、このお話をしたいと思います。ここはハワイ事例です。全国の高校生が180秒の動画のコンテストを行います。今年はオンライン授業が多かったので応募数が少ないかと思いましたが、実に700件を超える、去年200何件でしたので、3倍以上の応募が来ました。訪日観光部門とハワイ部門と日本遺産部門の三つの部門があります。このハワイ部門は、ハワイツーリズム、ハワイ州観光局から協賛をいただき、2年前からやっています。

今年はSDGsがテーマで、この3部門でいろいろな動画が寄せられました。ハワイ部門の応募要項のテーマは、「レスポンシブルツーリズムの学びから持続可能な社会を考えるスタディツアーを企画」です。ハワイ州のDMOは世界でも非常に進んでいるDMOで、今レスポンシブルツーリズムというものを訴えています。今までの観光は来てくれる人は誰でもウェルカムでしたが、地域側で来てほしい人を明確にイメージして誘導する。観光は非常に経済活動として大きいですが、一定の地域に負荷をかける活動でもあるので、プラスマイナスがあるので、プラスになる人だけ呼びましょうということで、「ALOHA PROGRAM」と言うラーニングサイトを作って事前にきちんとハワイのこと、自然のこと、あるいは原住民のこと、歴史などを勉強してから来てくださいというスタイルにしています。これが新しい観光かなと私は思っています。

ちょうど奥入瀬の蔦沼で、非常に早朝から渋滞が起こるので、いろいろな規制を今年から始められました。オーバーツーリズム対策です。私はこれは非常にいい試みだと思います。十和田奥入瀬の自然をうまく守って、自律的な行動が取れる観光客を集めていきたい。これはちょっと上からで申し訳ないですが、これからの新しいafterコロナの観光スタイルかなと思っています。

ある意味、関西で言うとお見さんお断りという、「失礼ですがどちらのご紹介ですか」というものです。CRMと言いまして、顧客をフィルタリングして、相性のいいお客さんをより多くして、相性の悪いお客さんを抑制していく、なかなか難しい高度なテクニックですが、いろいろな意味で、マイレージプログラム（資料ではロイヤルティ・プログラムです）と同様ですが、特に何度も訪れていただく人を鼻屑にしてもらう、このような戦略をこの地域も考えていきたいと思っています。

ただ、外からここへ来ると、廃墟が並んでいます。偉そうなことは言えないので、廃墟をまずはなんとかしたい。これを片付けつつ、新しい観光に取り組んでいきたいと考えています。

with コロナで新しい動きがあったので、いろいろ紹介しておきます。一つはオンライン

宿泊です。これは和歌山的那智勝浦で「Why Kumano」というゲストハウスが始めました。いろいろなゲストハウスが今大変ですが、なんとかお客さんとの関係をつなぎとめたいというので、オンライン宿泊、オンラインで泊まった感じになろうというものです。「ゲストハウスは泊まるのが目的ではなく交流するのが目的である」みたいな感じで、いろいろな人と交流を続けられています。

あるいは、オンラインツアー。那智勝浦では地元の生マグロを事前に送って、一緒に料理しながら食べましょうというもの。あるいはコトバスさんという四国のバス会社、これもコトバスツアーと一緒に旅行に行きましょう。あるいはアートイベントをオンラインで体感できる。旅マエプロモーションとして非常に有効かと思います。こういう動きがいろいろな形で出てきましたので、ハズレのない旅というか、事前にちゃんと地域を勉強して、その地域のホストと交流して、そういう旅マエがこれから充実してきて、ハズレのない旅が増えてくるとも思います。

あと、クラウドファンディングがすごい勢いで伸びました。READY FORの観光関係は1,971件もあります。我々も「湖水まつり」の後、クラウドファンディングでスカイランタンをやりましたが、新しいお金の集め方、それから事前に予約を取る方法として、このクラウドファンディングはこれからもこういった地域では期待できるかなと思っています。

最後にちょっとまとめてみましょう。ポストコロナの国立公園の誘客、五つ並べました。まずは「病気を治癒しましょう」というのは、これはコロナの病気もありますが、廃墟などそういったハンディをまずは解消したいと思っています。それから、やはり「経済を止めない。」観光業は人の産業です。観光人材は基本的に全国で不足していますので、この地域で多岐に渡る観光人材は頑張っていたきたい、特に若い人はこの地に残っておいてほしいと思っています。三つ目はご神体とストーリー。四つ目は不足する条件整理。先ほどの表です。この十和田はどういうストーリーがいいかというのを見つけたいと思っています。

あと必須条件として、やっぱりインフラや食事、宿泊、交通、ガイド、文化財、交流、産業、ボランティア、絶対必要なメニューだと思うので、小さい大きいはあるとは思いますが、確実に揃えておきたいと思っています。特にこの後ファシリテートしてくれる小林さんのところは、デザインなど椅子一つでも非常に素敵ですので、これからの観光はデザインも非常に大事だと思っています。

最後に相性の良いお客さんということで、我々が1から4までを整えながら、きちんとこの地域を理解していただく人に何度も来ていただく、それがワーケーションでもあると思っています。以上で私のお話は終了です。どうもありがとうございました。

司会：

小野田様、ありがとうございました。オンライン宿泊、オンラインツアー、これから必要になってくる観光のスタイルになるのかなと感じました。また、小野田様のお話にもありましたが、冬の奥入瀬氷瀑ツアー、これは冬にしか見られない表情なんですよ。こういった

自然豊かな場所をどのように県外、そして国外の方に伝えていくのかというのが課題かと思いました。

さて続きまして、「自然から見た国立公園の観光」について、青森大学総合経営学部教授、観光文化研究センター長、また NPO 法人みちのくトレイルクラブ代表理事でもあります佐々木豊志様よりご講演いただきます。佐々木様、よろしくお願いいたします。

3. 講演②

佐々木：

皆さん、こんにちは。青森大学観光文化研究センターの佐々木です。今日は「自然から見た国立公園の観光」ということで、先ほどのテーマから今度は逆で、自然が先に来ましたので、国立公園の観光についてお話したいと思います。

まずお話する前に、今、私は青森大学の観光文化研究センター長を仰せつかっていますが、実は大学に来たのは4年前で、それ以前は大学の先生でもなければ、こういう場でいろいろ話をする立場でもなかったのですが、もともと私のやってきたことからお話をしないと、今日の「自然から見た」という入り口に入れないので、まずは私の自然という関わり方からお話したいと思います。

NPO 法人みちのくトレイルクラブの代表理事もしていますが、みちのくトレイルクラブは、環境省が震災後に津波で被災があった東北東沿岸を、青森の八戸から岩手、宮城を抜けて福島の相馬まで 28 市町村を結ぶ歩く道です。歩く道を整備したのがみちのく潮風トレイルです。これを5年前から環境省さんのお声掛けで、実際に歩いてみて、その地域がどうなっているのか、そこに何の問題があるのかというお話を承って、私も実際に歩いて、新しくできる道について環境省さんと一緒に取り組みましょうということで、昨年全線開通して、それを運用管理するために NPO を立ち上げて、その代表もしています。歩くというところが一番ポイントになっているところだと思います。

今、画面に出ている、くりこま高原自然学校というものがありますが、これが本業です。自然学校に長年取り組んできましたので、今日のお話は、自然学校という視点から見た自然を通して、国立公園の観光というところにお話が移ればいいかなと思います。

まずここに映っている絵は、右が十和田湖の夏、自然を体験するカヌー。それから左側が八甲田です。雪が降りましたので今シーズンも雪のシーズンが始まりますが、特徴的な写真を持ってきましたが、まずは私の今までの自然観、自然を通して何をしたのかというところをお話ししたいと思います。

自然学校という業態に馴染みがない方もいらっしゃると思いますが、今から 25 年ほど前、栗駒高原に自然学校をつくりました。私自身は教育で大学に行きましたので、自然を通じた教育が専門です。自然学校がある栗駒山は国定公園の中にあります。96 年に設立しました。何を目的としたかというところ、ここに書いてあるとおりで、自然環境と共存し持続可能な平和で豊かな暮らしを創造できる「人をつくる」ということと「社会をつくる」というところに

貢献したいということで、四半世紀前に始めました。私とその自然を通して何をしたかと言うと、野外教育、それから冒険教育、ここが私の専門で、あと環境教育、環境を通じた教育活動がベースです。自然の捉え方としては、私は教育の場という見方が強いので、教育の場という見方の自然が、どうやって観光とつながるのかというお話をしたいと思います。

青森から南に150キロほど下ったところ、栗駒山に自然学校があります。栗駒の国立公園も、四季折々豊かな自然に囲まれています。ブナの森もすごく広くてきれいです。夏はニッコウキスゲも咲き、私のある自然学校は満州から引き上げた方々の入植した開拓の場所なので、開拓の皆さんも一緒に暮らしているところです。秋は紅葉です。紅葉は本当に、十和田八幡平、岩手、それから宮城は紅葉が素晴らしくきれいなところです。それから冬。なかなか寒くて雪が多くて、冬はどうしても嫌だという方が多いですが、私は生まれが岩手なので、冬は雪がなければ楽しくないぐらいの、いまだに雪が楽しくて、ここに来てワクワクしています。

そういうフィールドを使って子どもたちの教育をしてきました。夏休み、冬休み、大きな夏休みにはいろいろな体験をさせるということで、いろいろな体験をしてきました。北上川を200キロ下ったり、山に登ったり、それから冬の中でも泊まってみたり、冬山にアタックしてみたりということで、野外教育、特にアドベンチャーなプログラムを展開してきています。

これはイグルーです。イグルーもなかなか馴染みのない言葉かもしれませんが、北極圏のイヌイットが氷でつくる家です。これを教育のプログラムとして長年やってきました。子どもたち自身が自分の家をつくと、雪が嫌にならない、雪と仲良くなって、雪の地域に生きる力をつけてもらいたいなということでやってきました。

雪はいろいろなものができますので、夏のキャンプだと火を囲んでキャンプファイヤーがありますが、イグルーだけではなくて、雪のブロックで劇場もつくれます。最後の夜みんなでいい思い出をつくらうということで、シアターをつくるのも雪です。これは何も無いところからものをつくる、これは全員でつくります。こういう大きなイグルーをつくってキャンプをするということをやってきました。

自然学校はいろいろな方々が来ますので、期間限定でイグルーBarにしてみたり、イグルーだけではなくてコンパネで雪の家をつくるなど、こういう雪が嫌ではなくて、雪でいろいろなものがつくれるよという体験を積み重ねてきました。

冬だけではなくて夏は、最近取り組んでいるのは「森のようちえん」という、幼児の子どもたちの自然体験が少ないので、幼児の子どもたちを自然の中に連れ出そうということもやっています。国立公園の中なのでツアーのガイドをしたり、いろいろな自然の中の、余暇文化的な活動、コンサートをやったり、豊かな時間をつくる空間を共有するための場をつくるというようなことをやってきました。

それから「人をつくる」ですので、子どもだけではなくて人材育成、指導者の養成もいろいろやっています。自然体験活動や環境教育の指導者養成はたくさんありますので、こうい

う人の養成もしています。それからうちの特徴は、不登校、引きこもり、ニートの方々を受け入れて、自然の中でいろいろな活動をして支援をするということもやってきました。

あとは自然ですので、自給。畑のことをやる、田んぼもやる、家畜を飼うというような、ここまで来ると観光とはちょっと離れてきますが、私が考えている自然に近いところのコンテンツとしては、こういうものもあるということです。あと馬も飼う。これは教育の場として…コンテンツが観光にも生かせるのではないかとすることは私自身感じています。

最近気になっているのは食です。自然由来の食べ物は健康にいい、安全であるということが考えられるので、観光の要素としても食は大事だと思うので、自然由来の食は考えなくてはいけないと思っています。自然学校もこういうところにこだわって活動してきました。ピザの材料も自分たちでつくるなど、なるべく自分たちの循環の中でやるということです。

ということで、私の自然観というか、今まで自然をどう捉えてきたかというお話をざっとしましたが、教育から入っているということです。今日のテーマは「自然から見た国立公園の観光」ということなので、自然から見たというところで押さえておきたいのは、体験型です。体験をするというところがポイントです。ですから、自然体験型観光商品という考え方もいいかもしれません

どんな自然体験があるかということ、自然をフィールドにして、左側にあります自然体験活動、キャンプ、カヌー、カヤック、ラフティング、SUP、サイクリング、登山、ハイキング、それから釣りやダイビング、スキー、スノーボード、あとバックカントリー、イグルーをつくるなど、こういうアクティブな体験が一つのコンテンツになるかと思います。

もう一つ、今まで私は左側のアクティブな体験が軸でしたが、先ほどお話しした、不登校や引きこもりの子供たちを受け入れて一緒に暮らすというところで、暮らしに近い、根づいた部分が結構増えてきました。そこには食べ物、それからちょっと目を横にすると野草やハーブ、青森は縄文の文化がありますので縄文文化、この間観光文化研究センターで縄文をテーマに縄文体験をしました。黒曜石という鋭い石で鹿の肉を切って焼いて食べたり、どんぐりの実をすり潰して「ひつつみ」という郷土料理に入れて、縄文土器で食べてみたり、意外にアクティブな活動以外にも自然に近いなりわいのものが身近にあるので、農業体験や林業、漁業、ここに書いてある自然食、きのこ、あと各種療法、健康のためのフィールドとしての体験、それからものをつくる、東北だとマタギという文化がありますので、マタギの体験など、あと環境教育。自然保護という視点もぜひ残さなくてはならないなということで、いろいろな体験プログラムがあります。これをどうやって提供して展開するかということが、これからの課題だと思います。

後ほどご紹介しますが、私の大学のゼミの学生が、今4年生でこの後どうしたいかということで、ここに書いてあるDMO、DMCのような体験を通じた仕事をしたいと言っているので、それが事業として成り立つ、それから観光の産業として新たに展開できる仕組みをどうつくればいいのかというのが課題だと思います。

今日のテーマを整理すると、私の自然観は先ほどお話ししたように、教育的な自然体験活

動です。それが観光へということで、私が今までやってきた冒険教育、Adventure Education というものがあります。近年アドベンチャーツーリズムという言葉を目にします。来年アドベンチャーツーリズムの世界の会議が北海道であるそうですが、関係者の方にお聞きしたら、私はアドベンチャー教育をやってきましたが、ツーリズムは何かというと、旅行者が旅行を通して自分の殻が一枚むけるというか、旅行を通して自己成長することを期待して旅行しているのだと言っていました。これはまさに私が40年前からやっている冒険教育そのものです。40年前はそれが旅行、観光というところとは結びついていませんでした。教育として山や自然の中に来て、いろいろな体験を通して成長していくというのが冒険教育でした。これが今、近づいているなという気がします。

あと、環境教育にも取り組んできましたが、サステナブルという言葉、20年、30年近く前からお話ししていますが、サステナブルツーリズムというキーワードが今度出て、これも持続可能な旅行、ツアーということです。これも自分がやってきた部分と観光が近づいている気がします。それから野外教育、ソロキャンプをよくやります。子どもたち1人で山に一晩泊まって、暗闇の中で自分と向き合ってこいというプログラムをやります。ところが最近、ヒロシがソロキャンプということで、我々が何十年もやってきたことが、今、広がってきたのだなと感じています。幼少年の自然体験の活動をずっとやってきましたが、最後には大人になってそういう体験が生きて、そういうところで出掛けるという素地ができることが一番大事なのかなと思います。

お話を戻して、青森の自然です。今、雪がどんどん降っています。本当に冬がやってきました。去年の冬は全く雪がなくて肩透かしの冬でしたが、今年はシーズン始めから雪が降っています。この雪を避けては通れません。北国、北海道も含めて雪国のところは避けては通れません。でも多くの人たちは、雪を邪魔もの扱いします。雪かき大変だということで。冷たくて寒くて嫌なもの。この資源をなんとか観光に使えないかなと常に考えています。教育ではいろいろやってきました。

栗駒でも以前イグルーをつくりましょうというイベントがあって、親子でイグルーづくりをしますということで子どもたちが集まってきてやりますが、右上にあるのは雪を切るスノーソーというノコギリ、雪が切れます。子どもはこういう道具が珍しくて「わー、面白そう」と来るのですが、イベントでやると大体30分で飽きます。でも私たちがやっているキャンプは、子どもたちが泊まるイグルーをつくります。これは子どもたちが設計しました。彼らは泊まるイグルーをつくるのに3日間かかります。30分で飽きてしまう子がありますが、このキャンプでは3日間全然切れない、集中して寒さこらえてずっとできる。これはなぜかと言うと、キャンプのときには子どもたちにどうイグルーをつくるかグループで議論させます。喧々諤々、意見ぶつかりながら涙流しながら、グループごとに1日かけて設計図をつくります。これは私が清書できれいに描きましたが、子どもたちが図を描いてこういうイグルーをつくるんだという思いがあるので、あとの2日間半切れずにできるわけです。ですから、自発的に取り組むということが一番根本にあると思います。

観光も自発的に出かけるというところが原点にあるはずで、命令されて行って来いではない。根本的に行きたいところがある、やりたいことがあるということが原点だと思います。これが子どもたちのイグルーづくり3日間、最初自分たちの場所を決めて、それから踏み固めます。これは全員でやらないとできません。切り出します。一つ一つ積み重ねます。これを3日間かけてせり出して積むという作業があります。これは自然体験です。もちろんできあがったところに入るというのもアリかと思いますが、やっぱり自分で積み上げてつくったものと、できあがったところに入るというものでは全然感覚が違うと思います。子どもたちは寝ますので、すきま風があると寒いというのが分かりますので、しきりに穴を埋めます。あと、寝る以外にカフェをつくる場合は、テーブル、椅子もつくれます。こういう日常ではない、非日常の空間ができます。

去年、一昨年と、青森に来て、酸ヶ湯温泉や青森の駅前、ワ・ラッセの横に、学生と一緒にイグルーをつくりました。雪のないところから来る人は、こういう空間に入ると驚きなんですね。旅や観光は、そこにミソがあると思います。非日常の空間、非日常の体験ができるかどうかというところだと思います。こういうライトを入れて食事をとり、みんなでワイワイ、今年はコロナ禍なのでこういう密の状態はつけれないと思いますが、いずれまたこういうことができるようになれば、雪を使った取組は、特に雪の多いこのエリアでは、観光資源としてすごく生かせると私は思っています。

これは学生たちにも授業でやります。右下は大学の中庭、学生たちに地域貢献するには地域資源を生かさなければ駄目だという、ちょっとこじつけかもしれませんが、地域の資源を生かすための方法としてこういうものがあるよということで、学生たちに毎年教えています。だから、青森大学の学生たちは少しずつイグルーをつくる技術を身につけてきています。今、イグルーづくりというものを「教育から観光へ」と考えています。

先ほどお話した学生ですが、昨日ちょうどゼミの卒論発表会が終わったところで、私の1年生からのゼミで喜來くんといいます、彼が「八甲田山における冬の自然体験型観光の意識調査」をしました。彼は私と出会ったことによってSDGs、それから観光、環境のことを考えるようになって、来年は卒業せずに自分でこういう事業をしたいということで、今取り組んでいるところです。これは新聞に出ました。

彼の論文を紹介します。八甲田の酸ヶ湯のバックカントリーのツアーがありますが、そこに常連の方々が来ます。もともと彼はハンドボールで大学に来たのですが、私と出会ったことでスキーにも興味を持ってスキーをやり始めて、小学校以来スキーやったことないと言いますが、やはり若いですから、1シーズン、2シーズンやると技術も身につけて、酸ヶ湯のバックカントリーツアーのガイドのサポートというか、今年は本格的なガイド一本立ちするぐらいになりました。彼が感じたのは、酸ヶ湯に全国からいろいろな方々が来る、それも常連、何回もやってくる。ところが、地元にいる青森の人たちは、近くにこんなに山があつていいところなのに誰も行かないということです。

この意識は何が違うかというアンケートを取りました。常連の方々、LINEでグループを

つくって、そこにバツと流しました。68名の方から返事をいただきました。55名は、私が観光文化研究センターで講座をやったときに参加してくれた県内の方々です。特にアウトドアが好き、山が好きという人ではないです。その方々にアンケートを取りました。そこに何の違いがあるのかということで整理しました。冬の八甲田はこういうところです。なかなか環境も厳しい、でもパウダースノーでスキーが好きな人にとってみれば最高のパラダイスですね。バックカントリーということでツアーガイドがちゃんと組織されています。八甲田のオフィシャルガイドだけでもこれだけあります。六つの団体がお互い切磋琢磨しながら安全管理など、先週雪崩のためのレスキューの講習会もやっていました。彼は八甲田山酸ヶ湯ツアーガイドに所属しています。

アンケートを取りました。費用の部分、右側が常連さん、左が地元の人です。明らかにはっきり出ていますね。地元の方は自然体験観光にお金をかけていない。わざわざ八甲田に来る方は、やっぱりそれなりにお金をかけてくるというのが見えています。あと、どれぐらい山に行ったことがあるか。これも地元の方は近くの国立公園には全く来ていない。これをなんとか誘導したいなというところ。それからイメージ、常連の方は「仲間と交流する」、人なんです。常連の人同士、それからガイドに会いたい、あと宿屋の仲居さんに会いたいなど。でも地元の方はそういうだけじゃなかったですね。ですから、地元の方はアウトドアの共通の仲間が少ないのではないかと。

あと、八甲田山のイメージ、常連の方は「楽しい」です。でも一般の方は自然での活動の楽しさ、楽しみ方をあまり分かっていないのではないかと、こういう差は出たので、どうすればいいかというところで、常連の意見は、自然もそうだが、人と会えるというのはずごくキーポイントになっています。先ほどお話ししたみちのく潮風トレイルも、歩きながら地元の人と会うというのがハイカーたちの一番の意見というか魅力なところだと言っていました。ということで、自然プラス仲間というところが、非常に人というのは際立っているのかなと思います。

最後にまとめですが、「自然から見た国立公園の観光」というテーマでいただきましたが、自然体験型観光は、私は自然体験型教育から学んでつながっていくところがあるかなと。人とのつながり、あと自然環境の保護、自然保護、先ほど鳶沼のお話が出ましたように、自然保護に意識のある観光客が増えなくてはいけない。それから、国立公園は自然が深いところですから、リスク管理もちゃんとできる。これは冒険教育でもやってきています。人のつながりは野外教育、自然保護は環境教育、リスクマネジメントは冒険教育で、教育とまさにつながっているフィールドだなと思います。地域の子どもたちが国立公園でのこういう教育を受けるということが、国立公園の観光を育てるキーワードになると思います。昔我々の時代は、学校単位で山に行っていることが多かったのですが、最近の子どもたちは学校行事で山に行くところが少ないと聞きました。

観光文化研究センターは、地域でいろいろな観光の人材育成をしようということで動いていますが、今年環境省の国立・国定公園への誘客推進事業に手を挙げて、採択受けました。

後半残りあと幾つかありますが、今週イグルーをつくる人を育てる講座をやります。年明けで、バックカントリーはハードルが高いというイメージなので、初心者でも八甲田の山に入れる案内をするプログラムをつくってみようということで考えています。2月に入ると、イグルーづくり、イグルーをつくる人を増やしたい。誰もが雪のある青森でイグルーをつくることができることを知らせるために、コンテストをやりたいと思います。

それから八甲田ロープウェイの社長と会長と約束したのがこれです。八甲田ロープウェイ山頂駅にイグルーをつくるということで、観光客の方にもイグルーを見てもらいたい。雪がないところから来た人にとって、こういう雪ってすごいなというところを多くの人に知らせたいという活動をしています。いろいろなお話をしましたが、今年は今もう雪が降っているので、イグルーを全面に出しましたが、これでお話を終わりたいと思います。ありがとうございました。

司会：

佐々木様、ありがとうございました。佐々木様の冒険教育、大人の私が聞いていてもワクワクするものでした。普段青森で生活していると、確かに雪片付けが大変というイメージが先に来てしまいましたが、イグルーづくり、大変興味深かったです。

この後は有識者の皆様による、「これからの国立公園における誘客のあり方とは？」について、パネルディスカッションを行います。準備が整うまで、本日の開催地青森県について、映像でご紹介いたします。こちらをご覧ください。

司会：

たくさんありますので、ぜひ青森に足をお運びください。

ここからは有識者の皆様によるパネルディスカッションです。「これからの国立公園における誘客のあり方とは？」について、お話ししていただきたいと思います。まずご登壇の皆様をご紹介します。ファシリテーターを務めていただくのは、風景屋、小林徹平様。パネリストは、一般社団法人十和田奥入瀬観光機構理事長、小野田金司様。青森大学総合経営学部教授、観光文化研究センター長、また NPO 法人みちのくトレイルクラブ代表理事でもあります佐々木豊志様。今回のパネルディスカッションからご登壇いただきます星野リゾート奥入瀬溪流ホテル、アクティビティユニットディレクター、また NPO 法人奥入瀬自然観光資源研究会副理事長でもあります丹羽裕之様。それでは皆様、よろしくお願いたします。

4. パネルディスカッション

小林：

本日はよろしくお願いたします。ファシリテーターを務めさせていただく小林徹平です。

簡単に自己紹介させていただきます。2012 年から社会人生活を送っていますが、もともと宮城県の石巻市の被災復興計画を土木建築的に関わることを仕事としておりました。左上には石巻市の河川堤防が映っています。計 8 キロの堤防全体のデザインの座長のようなことを、させていただいております。右上はちょうど昨日竣工しましたが、小さな神社の改修をしたり、2018 年から十和田湖に関わっていますが、左下は地域をもう少し使ってみようというイベントである十和田湖マルシェを企画したり、右下は 2018 年 6 月、十和田湖畔の、先ほど廃屋は論外と書かれていましたが、使われていなかった廃屋をリノベーションして、現在ゲストハウス、カフェをしております。店舗名は yama ju です。私は計画や設計など、インフラに近いもののデザインをすることが多いので、本業として観光に関わっている経歴ではないですが、最近十和田湖で 1 年のうち 300 日ぐらいは生活していることもあり、今日はファシリテーターを務めさせていただきます。

まずはパネルディスカッションから丹羽さんが新しく参加されますので、丹羽さんから自己紹介をいただければと思います。丹羽さん、よろしくお願いします。

丹羽：

よろしくお願いします。簡単にプロフィールをご紹介します。十和田八幡平国立公園で森のガイド、マネージャーガイドとして活動しております。出身は北海道で、関東の体育大学に行って、いろいろな野外教育などもしながら、北海道でガイドをしたいということで北海道に戻り、アウトドアの養成学校がちょうどできたので、そこに入ってリスクマネジメントなどを学びながら、その後、ニセコでカヌーや自然のガイドとして活動した後に、2008 年に十和田の地域で、新しいアウトドア体験の会社の立ち上げに関わったことがきっかけで、奥入瀬に移り住みました。

こちらで活動して 13 年ですが、今は星野リゾート奥入瀬溪流ホテルで、アクティビティのディレクターとして、いろいろな観光コンテンツをつくったり、ビジターの人たちがこの地域を訪れたいと思う魅力をつくったりというかわら、NPO 奥入瀬自然観光資源研究会の副代表を務めていますが、奥入瀬の地域を中心に、どういった自然があるか、どのような魅力があるのかを調査して発信するというも行っております。本当にこの地域は素晴らしくて、国立公園が全国にある中で、ここが好きで移り住みましたが、僕が移住してきたときは、「なぜ北海道から来たの？」とよく言われましたが、北海道に負けないぐらいの自然の魅力があり、今はそれを伝えたいと思って活動しています。

何枚か写真をご紹介します。僕は冬山が大好きで、テレマークスキーをずっとやっており、今日も天気がいいので滑りに行きたいぐらいですが、本当に山が好きでよく滑っています。森のガイドもやっています。奥入瀬溪流というコケの認知度が最近出てきましたが、コケのガイドをしたり、もともとカヌー乗りだったので、十和田湖でカヌーで水鳥目線から自然を伝えるということも行っています。十和田湖の自然は、カヌーや水辺から見るととてもきれいなので、皆さんにも体験してほしいと思っております。

今お見せしているのがコケ散歩です。「大きな自然は小さな自然が集まってできている」というテーマで活動しているので、奥入瀬の自然をつくったコケという存在もご紹介しながら、いろいろなアクティビティの活動をしております。

最後に二つ、先ほど小野田さんからご紹介いただきましたが、環境省と十和田市と民間のホテルが集まって生まれたコンテンツで、氷瀑ライトアップです。夜の奥入瀬溪流の自然、滝が凍る瞬間や夜のいろいろな生き物に目を向けるということで、環境配慮型で始めたプログラムです。また今年話題にもなりましたが、溪流オープンバスツアーということで、2階立てのバスでコロナ禍においても3密回避で楽しめるプログラムを、国立公園の中でホテルを通じて展開しております。

小林：

ありがとうございました。観光という言葉が人それぞれ定義の仕方が違うと感じているので、観光を分解しながら、この地域、ひいては国立公園のような土地が、これからの時代、どのように使われ続けていけばいいのかということ、皆さんとお話しできればいいなと思っています。皆さん、それぞれのお話を聞きたいこともあると思いますので、1回目は私が振りますが、違う方に質問があれば、適宜振り合ってもらえればと思います。

先ほど、佐々木先生の視点での観光の話がありましたが、小野田さんから見たときの観光の視点と、あと小野田さんは熊野古道はよくご存じだと思いますが、ここ十和田も霊山十和田で、もともと修験の道ではない道が道として使われていますが、歩く道という素晴らしい、資源として奥入瀬溪流があったときに、ここの自然をより説明する意味で、熊野古道と奥入瀬溪流の違いを言葉にしてもらえると嬉しいなと思います。

佐々木さんには、栗駒山での生活や自然体験学習と、青森で同じような行動をされていると思いますが、「青森って、こういうところいいよね」ということもお話ししていただきたいと思っています。

丹羽さんは自己紹介にもありましたが、北海道の自然と青森の自然と、青森が好きで移住したということでしたが、さらに説明をしていただければと思います。

観光を分解しつつ、ここの自然の魅力をそれぞれ語っていただければと思います。

小野田：

観光の定義は僕はあまり意識していませんが、それぞれがすればいいと思いますが、熊野の話でいうと、結構皆さん、勘違いされていますが、熊野は自然がなくて、ほとんどが人工林です。熊野古道は自然がいっぱいで素晴らしいと言いますが、全部人工林です。欧米豪の人たちは、人工林を1日眺めて「アメイジング」と言ってるんですね。こういう営みで、昔から林業が行われていたんだということの評価していたり、先ほども少し言いましたが、そこは平和な場所なんですよということの評価をして、「自然が素晴らしいでしょ」と言われますが、案外そちらに目が向いていなかったりします。旅の本質を比べると、十和田の

ほうが圧倒的に自然は素晴らしいというか、高度な自然があります。

小林：

旅の本質というのは、小野田さんの的にどういうことを指していますか。

小野田：

それはみんな違うので。歩きながら人生を振り返る人もいるし、コスプレをしながら仲間と楽しんで歩いている人もいるし、歩いている人もばらばらで、巡礼をしたくて祈りながら歩いている人は 10%もないのではないかというぐらい、スペインのサンチャゴの巡礼道もそうですが、結構にわか巡礼の人が多いです。それができるのが旅ということで、日頃と違うことをその瞬間だけやりたいという人も多いと思います。

小林：

面白いですね。続きまして、佐々木先生、お願いします。

佐々木：

旅の定義ですよ。先ほどの画面でもありましたが、子どものプログラムは、夏休みや日常ではないときに来るので、旅というのは非日常の時間と空間を過ごすものかと思います。不登校、引きこもりの子を預かって、今度日常が入ってきたので、日常と非日常が自然学校で混在しました。よく民俗学ではケとハレという言い方をしますが、ケが日常でハレが非日常。晴れ舞台がそうですね。もののけの「ケ」は日常。旅は日常から離れることだろうなと。

どこかで聞いたことで、正しいかどうか分かりませんが、旅の語源が、いろりのある自分の家から出て行って、他人の火を見る、「他の火」と書いて旅の語源だと言っている人もいます。日常ある自分の空間から別のところに行く。自然学校のキャンプなどの自然体験活動は、子どもにとっては非日常で、教育と言いましたが、彼らにとっては旅で、そこに体験しに来たのかなという気がしないでもないです。

小林：

栗駒山と青森の自然、違いがあれば教えてください。

佐々木：

青森に来て4年で、栗駒山は20数年いましたが、どこに自然学校を立ち上げるかということで、フィールドを見ていて、栗駒に落ち着きましたが、栗駒はどちらかと言うと海を捨てました。海まで遠いんですよね。1時間、2時間かかります。なので山を中心に展開していますが、青森は来てびっくりです。八甲田と陸奥湾の距離の短さ。両方できる。山があって、川があって、里山があって、海がある。このコンパクトな自然観は、青森に来てびっく

りました。青森の人は、山から川から海まで、楽しめる場をすごいなと思っています。

小林：

ちなみに一番好きな青森の風景は、どちらですか。難しいですか。

佐々木：

去年、津軽半島を自転車で一周しました。大学に来て運動不足で、これは平日に有給休暇を取って行かなければいけないということで、津軽半島をぐるっと時計回りに走りました。中泊から竜飛岬に行く地獄の坂でした。ぐるっと回って陸奥湾に来たときに、蟹田だったか、陸奥湾越しに八甲田が見えるんですよ。それが「青森、全部見えているんだ」という感じでした。逆に八甲田から下を見ると、陸奥湾が見えるので、そういう風景が好きです。

小林：

いいですね。続きまして、丹羽さん、北海道との違いと旅の定義。

丹羽：

北海道と似ている部分もちろんあるんですよ。道南地域と自然が似ていますが、風土や文化は結構違います。僕が思うに十和田とか東北はすごく自然がやさしい。北海道は、何か原生の鼓動を感じながら厳しさもあるしという。その土地のもともとのルーツも関わってくると思いますが、四季がはっきりしていて、毎日入っても、自然が苦ではないという、やさしい自然が多いです。

先ほど佐々木先生もおっしゃいましたが、本当にギュッと詰まっていて、ここを拠点とすると、十和田湖、奥入瀬溪流、八甲田、全部が近くて、いろいろな要素が集まっていて、いろいろな楽しみ方できる。山に登って激しく滑ることもできるし、奥入瀬溪流でやさしく自然を見ることもできるし、十和田湖でのんびり空を見たりカヌーをしたり、いろいろな体験価値を創造できるという魅力。食べ物もおいしいし、住んでいてすごくいいなと思っています。北海道ももちろん素晴らしいし、日本全国いろいろないいところがありますが、青森県は「森」という字が入りますが、森の明るさ、森の美しさ、そして空気感がすごく好きです。

観光に関してですが、私は今、星野リゾート奥入瀬溪流ホテルで、旅や宿泊を組み合わせています。観光というと、「その地域の光を観る」と言いますが、国立公園内にいる私たちは、その地域の自然の美しさや生態系や科学、あとはフォークロアといわれる地域民族、そういったものを知ると楽しいので、そういったものをビジターに伝えたいという思いでいつも活動しています。

小林：

取り急ぎ一巡しましたが、皆さん同士で質問したいことはないですか。まだいいですか。そ

それぞれの経歴をお伺いしましたが、小野田さんは観光業を40年、佐々木先生も自然教育・学習を40年、丹羽さんが自然ガイドを20年されていて、この20年、40年で、社会の変化とともに、観光のあり方、教育のあり方、変化として感じていることを、ぜひ教えていただきたいと思います。着地点としては、これから十和田奥入瀬のような国立公園が、どういう方向性に向かっていくのがいいのかという意味で、まず過去を知ってみようという意味合いです。小野田先生からお願いします。

小野田：

自分が旅行会社に入った40年前、観光がこんなに脚光を浴びるとは思いませんでした。どちらかと言うと、サブカルチャーな世界、やくざな仕事だと思っていて、観光業で大学の先生になるとも思わなかったし、青森県にこんなに来るとも思わなかったし、観光産業が日本のトップ企業になるとゆめゆめ思わなかった。今でも、どこかでそうはならないのではないかと考えているところもあります。全国の自治体がこんなに観光のことをしたり、大学がやったり、住民がやったり、環境省が観光のことを語るというのは、僕がこの40年で一番驚いたことです。

小林：

先ほど小野田さんがスライドの中で、「廃屋は論外」という写真を上げていましたが、ご存じない方もいるかもしれませんが、あれは全部、今、十和田湖畔に並んでいる廃屋です。バブル期後半ぐらい、年間350万人、十和田奥入瀬地区に観光入込客数として来ていて、今が多分100万人前後、一時期80万人ぐらいまで下がったものが、120万ぐらいまで上がり、今コロナで今年はどうなっているかという状況ですが、廃屋になっているのは、十和田湖に来る人が圧倒的に減って、日本的には観光の数字は伸び続けているんですか。

小野田：

全世界から来ていますから、日本の観光への人気はすごくあるけれど、僕が一番驚くのは、十和田湖が超美人だということです。こんな素敵な人はいない。世界でもこんな美人の湖はない。なぜそこに汚い廃屋があるの？という感じです。この美人を僕は売りたいのだけど、今来ると廃屋も見えてしまう。何が悪かったのかは、小林さんなんかがよく分かると思うけど、それをとっとと片付けて、美人が住んでいる地域は美しくなければならないと思うので、そうしてほしいです。

小林：

美人な湖、いいですね。もともと女性の神様がいらっしゃるからですね。続きまして、佐々木先生、お願いします。

佐々木：

自然学校をやる前は、東京に14年いて、企業にいて、ちょうどバブルのときです。バブルで、「これ、おかしいな、違うな、嘘だな」と、相当お金もらっていました。でもこれはちょっと違うということで、お金に翻弄されない生き方をきちんと受け止めて、次の世代に伝えなければいけないということで、収入ゼロから自然学校を立ち上げました。今回コロナ禍で、またグローバルな経済の見直しのときだと思います。

40年でもどう変わってきたかという、社会が多様化して想像もつかない形になっています。スマホも想像していなかったし、連絡を取るのも昔は苦勞しながらやった。子どもたちの教育を考えると、教育界では「三間（サンマ）が足りない」とよく言います。三つの間。時間がない、遊ぶ空間がない、仲間がない。でも私はもう一つ間を入れて、四間にしたい。何が足りないか、手間です。手間をかけてやることを省いてしまっていることが多い。観光の形も変わってきたと思います。食べるものや、行きたいところに行ったり、お金を払って手に入るものはたくさんありますが、体験型の観光、手間をかけることで、体験した人1人1人が何か気付いたり、何か変化する。それが非日常の体験で、日常に戻ったときに何か役立つものがあると信じているので、手間はかかるけど面白い体験をやってみるというプログラムがこれからは必要。その手間を惜しまないで関われる人づくりができればと思います。お金だけで片付けるのではない観光が広がればいいと願っています。

小林：

いいですね。時間、空間、仲間、手間、四間ですね。丹羽さん、どうですか。

丹羽：

40年、60年と来て、私はまだ20年弱ですが、だいぶ変わってきたなというのと、変わっていない部分もたくさんあります。僕がアウトドアやガイドに入り始めたときは、世の中が少し変わってきたところで、体験やアクティビティが増えてきて、人気が出てきたタイミングで、「カッコいいな」という憧れから入りましたが、そのときは体験で終わっていた気がします。体験の価値の深いところまでやっていなかった気がします。「楽しかった」とか、心のリフレッシュが多かった気がします。最近は全国のガイドさんたちも、より地域の本質や伝えたいものを明確に持ってやってきているので、日本全国いろいろなところで面白いツアーや体験ものが増えてきたと感じています。

ただ、まだガイド業やアウトドアの体験は、年間を通して不安定です。特にコロナ禍で変革が求められていますが、まだまだ体験価値をビジターに伝え切れていないし、本当に来てほしい人にまだまだ届けられていないということも思ったりします。かなり変わってきてはいるけど、もっと頑張りたいというのが心情です。

小林：

佐々木先生に聞きたいのですが、十和田湖畔は集落が150年かけてつくられたのですが、その前は年間を通じて150日ぐらいしか人が入ってこなかった場所で、僕が都市計画やまちづくり的な視点で生活をしている人間としては、この場所は人が住まないほうがいいのではないかと、ちょっと思ったことがあります。今は住んでいるので、思っていたこととやっていることが全然違うのですが、自然体験学習をやる場所において、小野田先生の先ほどのスライドの中に、テーマがあって、インフラがあって、その後に体験だよという話がありましたが、どれぐらいのインフラが本来は必要なのか。特に国立公園の自然は奥深い場所もあるので、どれぐらいのものがあれば、いい体験や教育ができるのかということに対して、何かお考えがあれば教えてほしいです。

佐々木：

同じキャンプでも、グランピングといわれる結構至れり尽くせり、普段のものと何が違うの？というぐらい自然の中に持ち出すのもアリでしょう。あと本当にサバイバル、水も電気も全くないところでやるというフィールドもアリだと思います。そこに来る人が何を求めて来ているのかによって、違うと思います。ここが150件ですか。

小林：

地域が開いて150年、今は200人ぐらいです。

佐々木：

栗駒の自然学校があるところは、満州から引き揚げて、歴史的には70年。ブナの原生林で、そこを切り開きました。全国に開拓地があるはずで、今までの道路に開拓道路を取り付けて開拓する。開拓道路が一番長い開拓地が栗駒だと聞きました。それだけ山奥なんです。なんでここに人が住むの？当時は畑を広げなくてはいけないということで、山の中に一番多いときで130軒あって、学校も分校ではなく本校がありました。今は20軒ぐらいしかありません。開拓1世は80代、90代、開拓2世は60代、開拓3世は30代後半。開拓3世はほぼいません。そこは昔のように戻るのか、どうなるのか。時代の流れで、地域地域のエリアがどう繁栄して朽ちていくのかを、目の当たりにしています。

小林：

これからまた考えていこうという状態ですかね。

佐々木：

うちの自然学校は、周りの開拓農家と違う時代に入ってきたので、80年前はとにかく木を切り開いて畑にしなければいけない。土に向かって、生産物を出して、そこでお金を稼ぐ

ということですが、私が来た20年前は、農家ではないので違う価値観で来ているので、私は冬が好きで、「栗駒の自然、いいですね」と言うと、地元の方は「そんなに自然がいいなら、冬、ここに住んでみろ。どこがいいんだ」と、自然がいいものと思っていない。冬を越してはじめて認められる。

私は冬が好きで入ったので、彼らの仲間に入ったときに、なぜああいう発言をしたのか。栗駒の自然のフィールドはどういう場なのかということで、場を分析しました。私は教育の場として見ていて、国定公園になって観光の場でもあり、そして農業をやっているので生産をする場でもある。あと暮らしの場でもある。彼らは暮らすという視点で来たんですよ。「暮らすには、ここは大変だぞ。自然がいいなんて、軽々しく言うな」と。私は教育の場として最高にいいなという形で言ったので、そこで場の捉え方が違っていった。地域地域で場の捉え方が、それぞれ違うと思います。でもそれぞれが、価値観をどう一致させて、この地域の未来をどうつくっていくかというところが大事な気がします。最初来たときは、翻弄していました。迷ったところは、そこでした。

小林：

面白いですね。暮らしと教育と共存する。

佐々木：

十和田で観光業をしている方々は、暮らしがあるんでしょうね。

小林：

この人は暮らしが観光なんですよね。それが面白くもあり、なかなか変わってこなかったという難しさでもあると思います。他の地方集落に行くと、手触りがある風景というか、畑をやっていたり、海岸部だと漁具が落ちていたり、でもあれが生活のにじみだしとして、「ああ、田舎に来たな。ああ、いい集落だな」と思うきっかけになりますが、十和田湖畔の場合は、本当に観光業しかないのだから、この人たちは何をして暮らしているのだろうというのが、最初の僕の印象でした。それがもう少し、暮らしを見える化していくと面白いのではないかと感じていました。

ちなみに丹羽さんは、奥入瀬溪流ホテルで働いていらっしゃいますが、奥入瀬溪流ホテルも最近人気が出ていて、面白くなってきていると思いますが、ああいうホテルがあることによる地域への効果というのは、どういったところで感じますか。

丹羽：

今、たくさんのお客さんに来ていただいて、地域を元気にしているのを本当に感じています。私たちがいろいろな魅力をつくって、お客様に来ていただいて、地域の経済活動においては、仕入れ業者やバスなども含めて、いろいろところに対して影響力があるなど感じてい

ます。それと同時に、国立公園の中にホテルがあるので、環境への影響度、保全しながらお客様にしっかり、国立公園の中にあるホテルはすごく大切だと思っているので、その中でお客様にしっかりレクチャーと言いますか、自然がちゃんと保全できるようにということも、何かしら伝えながら、旅の楽しみも伝えたいと思いながらやっています。

小林：

丹羽さんか佐々木先生だと思いますが、国立公園の中にあるホテルの珍しさというのは、世界的に見たときに、結構面白いことですか。世界の国立公園だと、入場規制をしていて、キャンプしながら1週間とかやっていたりしますが、国立公園の中にホテルがある面白さは、どういうところにありますか。

佐々木：

ホテルがあると言うよりも、日本の国立公園はアメリカの国立公園と違って、大自然があるエリアが国立公園になっているので、ほぼ人が住んでいないところが国立公園ですが、日本は、みちのくトレイルの三陸復興国立公園はまさに暮らしているところが国立公園ですので、生活しているところと国立公園がすごく密着していると思うので、そこを含めて考えなくてはいけない。でも十和田は、どちらかと言うと、少し奥なので、普通の人が生活している生活感は見えないですが。イエローストーン国立公園に行ったときに、間欠泉があるところに、木造の大きなログハウスのホテルがあって、どういう経緯でつくられたのかは分かりませんが、奥に行って、ああいう宿泊施設があって、規模も大きくてすごいなと思いました。それはログハウスだったので、マッチしていた感じがありました。

丹羽：

日本と海外では、国立公園の元々の目的が違ったり、環境や自然の大切さを伝えるために国立公園にしたという、もともとのでき方が違いますが、その中で、ホテルはあるけど規制がものすごく厳しいとか、制限がかなり強い。日本だと国立公園の色々なグレードがありますが、ホテルが建つようなところは、利用しながら保全するところなので、そもそも違うというのはあります。

佐々木：

栗駒も国立公園の中で、私の自然学校がある土地は特別地域で、何をやるにも届出。本当に細かいくらい。何もできないくらい網が掛かっているというのは、法律的には実態としては日本もそうです。

小林：

昔からの変化で言うと、明らかに時代のタイミングが変わってきていて、これからの誘客

を考えようというのは、なかなかむちゃぶりのテーマではないかと思っていて、なぜかと言うと、どういう社会になるか分からない状態なので、最後に皆さんから、これから取り組んでいきたいと感じていることを簡単に、大切な情報を漏らさない程度に、少し漏らす程度に、これから取り組んでいきたいと切実に思っていること、感じていることを、一言ずつお伺いしたいと思います。小野田さんからお願いします。

小野田：

今日のテーマの「国立公園への誘客」というので、どんどん国立公園に行きましょうキャンペーンみたいな感じがしますが、あまりしたら駄目だよなと思っています。観光産業、日本で大事ですよ、増やしましょうという背景がありますが、人数で増やすより、金額で増やすというか、質で増やすというか、奥入瀬の良さは、星野リゾートさんのブランドがすごく大きいと思うので、そういういいホテルに泊まる人がいい体験をする、そういう循環を十和田湖周辺でもつくっていく、あるいは街中でもつくっていく。そうやって、数よりも質、そちらを追いかけないと、魅力ある自然が壊れると、直しようがないので、そこは慎重にやりたいと思っています。

佐々木：

私は観光文化研究センターのセンター長ですが、もう一つ、大学にSDGs研究センターを、おとしつくりまして、その副センター長もしています。「持続可能な」という言葉を、ようやく耳にするようになりましたが、私は1987年のブルントラント会議から追いかけていたので、ようやくという感じで、今、私もバッジを付けていますが、最後の目標はやはりSDGsです。全てが循環して持続できる。森林も水も循環して、断ち切れないうちに視点を置けば、オーバーツーリズムの関係で、規制はもちろん大事だし、それを続けられる意識のある人が増えることと、仲間、常連の方々いろいろな人とつながることなので、心の循環も含めて、全てが循環して、持続できる旅行なり社会になるというのが、目標にしているところです。観光文化研究センターも、ベースはSDGsです。

小林：

小野田さんがおっしゃっていた、あまり来過ぎては駄目、量より質だということは、どう思いますか。

佐々木：

そう思います。質を高めていかないと。量の時代は終わりでしょう。大量生産、大量消費。持続可能志向にして、質を高めていくことだと思います。

小林：

ありがとうございます。いい方向性で進んでおります。丹羽さん、お願いします。

丹羽：

今のお二人の見解も踏まえてですが、景観型の観る観光は時代遅れというか、そういう時代ではなくて、その場所で本質的な価値を体験することが、すごく重要だと思っています。十和田八幡平国立公園には、秋に有名な鳶沼というところがありますが、もうオーバーユースがすごくて、保全しないといけない、お客様にどう感じてほしいのか、どういう人に来てほしいのかを、地域と顧客がマッチングしながら、滞在の仕方や魅力を提案していかないと、地域が壊れてしまうので、そういったところは量より質を大切にしながら、そしてこの素晴らしい十和田地域の自然を、他とどう違うのかをしっかりと発信しながら、この地域のファンが増えるように活動していきたいと思っています。

小林：

ありがとうございます。レスポンスブルーツーリズムから、ちゃんと量ではなく質を見極めながら、美人の湖ばかり、美しい青森の自然を楽しみながら、暮らしに近い体験だと思えますが、循環する社会をつくっていくために、国立公園が今後も使われ続けていくといいなと、改めて感じました。個人的には「四間」が非常にいい言葉で、残っております。

では、司会に戻させていただきます。本日はありがとうございました。

司会：

皆様、ありがとうございました。私自身も皆さんのお話を聞いていて、青森の良さを改めて感じる事ができましたし、青森にまだいらしたことがないという方は、ちょっともったいないことをしているのではないかという気持ちにもなりました。そして視聴者の皆さんにとっては、これからの未来へのヒントが、何か見つかったのではないのでしょうか。

それでは閉会に際しまして、十和田八幡平管理事務所所長、森川久よりご挨拶をさせていただきます。森川所長、よろしく願いいたします。

5. 閉会挨拶

森川：

本日はお忙しい中、4名のパネリストの方々には、貴重なお時間とご意見をいただき、感謝を申し上げたいと思います。国立公園は日本全国34カ所ありますので、1時間、2時間、足を伸ばしていただくと、本日ご視聴いただいている皆様方の近くにもあると思います。あらためて、ここも国立公園だったのかと認識される機会が持たれるといいなと思います。残念ながら、国立公園という認知度が日本国民の中で広がっているかという点、若干足りない部分もありますので、まずは国立公園を知っていただきながら、国立公園の価値を高めていければと思っています。簡単ではございますが、本日の閉会の挨拶とさせていただきます。

本日はありがとうございました。

司会：

森川所長、ありがとうございました。ご講演の皆様、ありがとうございました。以上をもちまして、「国立公園への誘客」と題して行いましたオンラインシンポジウムを終了させていただきます。

以上